

表題	返礼品と礼状		
著者	高見 晴彦(取り纏め)		
作成日	2023年5月1日	最終更新	2023年5月25日

キリスト教会葬儀研究所(CCFI) <http://www.ccfi.jp/>

2023.05期テーマレポート

[実務者向け]

本レポートは主に葬儀士（葬儀実務者）及び教会における葬儀委員等の実務者向けに作成されたものです。

表題のテーマにかかる概略や様態の変遷、実務上の留意点等を纏めています。

2023年5月1日 返礼品一次概論

2023年5月2日 香典類に関する補足追加 他一部追補

2023年5月3日 返礼品不足項目追加

2023年5月10日 返礼品一部追補 礼状途中まで追加

2023年5月13日 礼状の文章構成追加 サンプルデータ修正・追加

2023年5月15日 礼状一部追補 表現の例追加 コラム追加 実例追加

2023年5月16日 礼状軽微な修正

2023年5月22日 表現の例・文例追加 軽微な修正

2023年5月25日 表現に関する注意追加

返礼品

本稿では「返礼品」を葬祭における主宰者から他者への贈り物全般を指すものとして取り扱います。また後半の「礼状」も同様に葬祭において主宰者が他者から受けた金員・供物・役務・弔慰その他に対して返礼するための挨拶文を記した書面として取り扱います。

▽返礼の目的による区分

「返礼品」をその目的によって区分すると、概ね以下のようになります。

- ① 弔問に来てくれたり、葬式などに参列してくれたことに対するもの
- ② 香典類を受けたことに対するもの
- ③ 上記①と②を兼ねたもの
- ④ お供え物や弔電などを受けたことに対するもの
- ⑤ 葬儀の実務を手伝ってくれたことに対するもの

▽「香典類」に関する補足

「香典」は本来「香奠」と書きます。「典」は「奠」の代用字で、「奠」は「供えもの」という意味です。から、葬祭において死者に対し香を供えるというのが本来の字義です。現在において香典とは、外形的には概ね葬祭に際して参列者などから主宰者へ贈られる金員のこと、その意義は「死者に供えるべき物の対価とすること」「主宰者を経済的に助けること」「自らの弔意を示すこと」などが混在したものとなっています。より詳細な香典の由来や変遷については、今日様々な書籍やウェブサイトなどで紹介されていますので、ここでは省略します。

「(御)香典」は他に「(御)香資」「(御)香料」などとも呼ばれ、神式葬儀では香ではなく玉串を供えるため「(御)玉串料」、キリスト教式葬儀では「御花料」「(御)献花料」などとも呼ばれます。(※なお一部のマナー本などではカトリックの葬儀の場合には「御ミサ(弥撒)料」などと書く、としているものがありますが、ミサを執行してもらったことに対する謝儀であればそれは司祭に対し行うものであって、主宰者に対する香典の代用とするのは適切ではありません)

本稿ではこれらを総じて「香典類」と呼びます。なお近代日本のキリスト教社会においては、死者に対する供え物という意義を嫌ったり、異教的と見なされる習俗と距離を置こうとする心理などから、この香典類の受け取りを辞退する傾向が比較的強く見られますが、一方で海外のキリスト教が主な国における日系人コミュニティの葬儀ではそのまま「KODEN」として習慣づいているようなケースもあり²⁾、香典類を宗教的と見るか大衆文化的と見るかは温度差もあります。また今期テーマは実際に行われる返礼に主眼を置いていますので、香典類を辞退するケースについてはあまり詳述しません。

▽① 弔問に来てくれたり、葬式などに参列してくれたことに対するもの

①は現在では主に近畿圏などで広く行われる返礼で、「会葬御礼、御会葬御礼品」「供養品、粗供養」などと呼ばれます。概ね税別500～600円程度、高くても1000円程度の品物を参列者に配ります。この場合、②は後日改めて行われます。

意味合いとしては、まず字義通りわざわざ足を運んでくれたことに対する労いや感謝の気持ちを表す、ということがひとつです。そのため、この様態では通夜・葬式と両方に参列した人には各日それぞれに会葬御礼を配ることが普通で、また一家族単位ではなく個人単位で配られます。また、参列者に対する通夜振る舞いなどの飲食物の提供に代えたもの、という理解もあるようです。そのため、通夜・葬式と両方参列する人の受け取る会葬御礼が同じにならないように各日の品種を変える場合には、通夜には茶・コーヒー・砂糖など口に入る物、葬式にはタオルなどの実用品を選択した方が良く、という人もいます。

「供養品」という言葉は、遺族が金品を周囲の人々に無償で施すことによって功德を積み、その功德を死者に振り向けて冥福を願う、追善供養の一種との理解から生まれたものです。地域によっては古くは葬列の道中にいる人に幅広く金品を配るという習俗(道供養、などとも言う)もあったようですが、その対象を参列者に限り、返礼色を強くしたもの、ともいえます。商品としては「供養品」、配布するにあたっては謙って「粗供養」と呼び分けられることもあります。

▽② 香典類を受けたことに対するもの

②は新生活運動など葬儀返礼簡略化が定着している地域を除けば全国的に見られる返礼で、葬儀に際し贈られた香典類への返礼として行われます。受けたものが香典であれば「香典返し」、玉串料や御花料であれば「偲び草」などと呼び分けられることもあります(※

偲び→記念する、草→品物、ですから、要は記念品ということで、香典という言葉を使わない宗旨のために考案されたものでしょう)。近畿圏などでは②を行うタイミングが満中陰(中陰期間が満ちる、つまり四十九日明け)の頃であるため、「満中陰志(まんちゅういんし)」などとも呼ばれます。

香典返しの金額は受けた香典類の3割(三分返し)や5割(半返し)ということが多いでしょう。一部地域においては10割(全返し)の額で行う習慣があると言われていますが、おそらくは葬儀に際して役務的相互扶助が長く残っていた地域において、「本来は次に相手の家の葬儀があった時に働いて返すはずのものだが、その機会が得られるかどうかはわからないので一旦返しておきます」という意味合いではないかと推測しています。現在のマナー本などでは、全返しは香典を贈った相手に「気遣い無用」と意思表示するため、などと書かれていることもありますが、香典を贈った側の気持ちを無にするものだという批判も強く聞かれます。一方で、香典類の贈り主との関係性により、目上などから受けた場合は少ない割合で返し、目下から受けた場合は多い割合で返す、などと言われる場合もありますが、いずれにせよ定まったものではありません。また、香典類を受けたその場で香典返しを行う「当日返し」(即返し、などとも言う)の場合には、香典類の額に関わらず一種類定額の品物を用意する(一点返し、などとも言う)ケースや、香典類の額を数段階に分け、その段階毎に品物を割り当てる(三点返し、五点返し、など)ケースもあります。

▽③ 上記①と②を兼ねたもの

これまで述べたように①と②は本来その目的が異なるもので、例えば近畿圏では2000年代に当日返しの導入が試みられた頃には、同時に行われるとしても①と②は別のものであって、香典類を持参した人には会葬御礼と香典返しの二つの品物が渡されました。しかし近年、関東圏など当日返しが広がっている地域においては、その返礼品が①と②の性質を兼ねたものであるという理解されることが一般的になってきているようです。そのため、近畿圏で葬儀の打ち合わせをしている際、施主が関東圏の葬儀に慣れている場合、会葬御礼の説明をすると「つまり香典返しですよね?」と問われ、趣旨説明を行うことも少なくありません。

当日返しにおいてこれらを兼ね合わせるメリットとされるのは、主に取り扱いの簡便性です。この場合は通常、会葬御礼同様に品物は一種類ですから、受付の担当者は参列者が

香典類を持参したかどうかに関わらず同じ品物を配ればよいからです。デメリットは、返礼品の費用が受け取る香典類の額に対して高額になりやすい、ということです。例えば「1万円の香典を持参する人がいるかもしれないから、失礼のないように3千円の品物を用意する」としたとき、実際には5千円、3千円、また香典を持参しない人がいたり、1万円でも夫婦で持参したような場合には、香典返しを独立して行うよりも高い割合、あるいは香典類の額を超えて返礼を行うことになるからです。そのため③の様態が増加した背景には、消費者に対し簡便性のみを強く押し出して売上を増やそうという、葬儀業界からの誘導があったのではないかと批判されることもあります。また香典類と返礼品費用との独立した収支が明確でなくなるため、税務上主宰者の収入として認定されたり相続財産から控除されうる範囲に疑義が生じるという問題や、同様に葬儀費用に関する統計を取る際、設定された区分によっては何れに属する費用か判別できず、統計の正確さを損なうおそれがある、という指摘もあります。

▽④ お供え物や弔電などを受けたことに対するもの

お供え物（供花・花輪・楯・果物籠・提灯など、弔意を表す進物類）を受けた場合にも、②に準ずる返礼を行う場合があります。ただし、香典類への返礼に比べると行われなことも多く、また行われたとしても金額的割合はより抑えられる傾向があり、後述する礼状のみで済ますこともあります。これは、香典類の返礼の場合にはその受けた金員の中から費用を支出することができますが、お供え物の返礼の場合には費用が全て施主の持ち出しとなるためです。また弔電を受けたことに対する返礼は、より軽微に行われるか、特段に行われなことも多いでしょう。実感としては、礼状を送付するだけでもずいぶん手厚いほうだと思います。

▽⑤ 葬儀の実務などを手伝ってくれたことに対するもの

近年、葬儀に際してその実務の多くは葬儀業者が担いますが、受付など一部の実務に関して友人や同僚など、主に親族外の協力を得たとき、その返礼を行う場合もあります。特にキリスト教会においては教友がなんらかの役割を担いたいという希望も強く、受付係・献花係・駐車場の誘導係などを葬儀委員などが分担するケースも多くあります。ただし、旧来の葬儀における役務的相互扶助に通ずる感性も強く、このことについての返礼は互いに行われな、あるいはしないよう教会が取り決めているケースもあり、割合として多いものとも言えません。また行われても少額であったり、委員などの集団に対して分け合える菓子類を会合に差し入れるなど、抑制的に行われることが多いでしょう。（※なお稀に、

逆に葬儀における役務提供者を決め、その報酬を定めている教会もあるようですが、この場合は金員で報酬が支払われることとなります。奏楽者への謝礼をこの類に含めることもあります（多くの例では宗教者への謝礼の類として取り扱われます）

▽返礼品の品種

会葬御礼の品種には主に以下のようなものが見られます。

1. 飲食物（茶葉・コーヒー・紅茶・砂糖・菓子類など）
2. 繊維もの（フェイスタオル・ハンドタオル・ハンカチなど）
3. 金券類（商品券・百貨店券・プリペイドカードなど）

会葬御礼が独立して行われる場合には金額も大きくはないため、事業者の取り扱う品種は自ずと限られてきます。ただし施主側が用意する場合には、故人または遺族の著した、または作成した、あるいは推薦する、書物や小物などが用いられる場合もあります。ノンクリスチャンの参列者のために、あるいは他者への布教の用にと、聖書などが配られるケースもたまにあります。

香典返しは金額が大きいため品種の幅も広く、百貨店で取り扱われるもの全般、と理解しても差し支えありません。比較的少額帯であれば会葬御礼と似通ってくるでしょうし、高額帯であれば布団や家電などが用いられる場合もあります。また近年では受け取った人がカタログの中から自分で商品を選択できるギフト（カタログギフト、チョイスギフト、などとも言う）が用いられることも多くなっています。

▽新生活運動が展開されている地域における香典類の贈答慣習

新生活運動は昭和30年代に起こった社会運動で、冠婚葬祭の質素儉約を心がけたり、贈答などを抑制し、虚礼を廃し合理的な生活をしましょう、という取り組みです。現在でも群馬県・栃木県・埼玉県など主に北関東圏で見られ、自治体を挙げて推進しているところもあります³。新生活運動が展開されている地域では、香典類の額を1000円や2000円以内などと決め、香典返しは行わないよう勧められています。またお供え物などについても、自粛する、あるいは行っても団体のみなどと勧められているケースもあります。この際、後述する礼状類については作成・配布されているようです。

ただし、新生活運動が展開されている地域においても様々な考えを持つ人が暮らしています。新生活運動に賛同するかどうかは任意であるため、葬式などの受付も「新生活受付」と「一般受付」が並べられ、参列者が選択する場合もあるようです。このため、新生活運動が展開されている地域においても香典返しなどが皆無というわけではないでしょう。

▽ギフト事業者の業態と変遷

高度経済成長期に葬式などの参列者数は全国的に増加の一途を辿りましたので、この頃には葬祭ギフトに特化した事業者も多数現れました。彼らは多くの場合、いわゆる仲卸のように、メーカーや卸から商品を仕入れ、あるいは百貨店などと提携し、葬儀社へ会葬御礼を納入し、また葬儀社と提携する形で葬儀主宰者から香典返しを受注しました。

最盛期には会葬御礼だけでもひとつの葬儀に数百個、場合によっては1000個に届くようなこともありましたが、前述のように会葬御礼の商品単価は決して大きいものではなく、ギフト事業者の売上の中心はあくまで香典返しにありました。けれども香典返しの受注はもっぱら葬儀主宰者と直接関わる葬儀社からの斡旋に依っていましたので、ギフト事業者はまず葬儀社への会葬御礼の提供をいかに受け入れてもらうか、ということに腐心しました。価格競争もさることながら、さらに利便性を評価されるよう、葬儀社の事業所ではなく各葬祭現場へ時間に合わせて直接商品を配達することなどは元より、使用後は残った商品を回収し、実質使用した個数を精算して料金を請求することなども一般的になりました。他にも礼状類の印刷や遺影の作成、時には葬式場受付の設営や人員の提供などまでギフト事業者側から行われるほど、サービス競争が激化したケースもありました。葬儀社側もそれらのサービスを当然と受け止め、サービスの提供ができないギフト事業者は事実成り立ちませんでした。

90年代後半に入ると葬式などへの参列者は目に見えて減り始め、それに伴って香典返しの受注も減少していきましたが、ギフト事業者は今度はその減り始めたパイを奪い合うために、サービスの提供を控えることができない状態に陥りました。このためギフト事業者の採算は急激に悪化し、00年代には廃業する事業者も増えました。現在は過度なサービス競争は鳴りを潜め、配達も事業所まで、あるいは小規模の葬儀社であれば逆にギフト事業者の事業所へ商品を受け取りに行く、などということも珍しくはありません。また即時受け渡しが困難な状況も増え、比較的売れ筋のわずかな種類の商品を葬儀社がストックしているようなケースもあります。

▽阪神間における当日返し導入の試みと挫折

00年代中頃、減少する香典返しの受注を少しでも確保しようと、多くのギフト事業者が注目したのが香典返しの即日返しでした。中陰が過ぎた頃に香典返しを行う「忌明け返し」では、売上が立つ日が遅れますし、その間に葬儀主宰者の気が変わり別のギフト事業者に受注を取られてしまうことを懸念したためです。即日返しが先行していた関東圏などの事例を参考に、阪神間のギフト事業者も即日返しの導入を試みましたが、これは簡単ではありませんでした。

ひとつは関東圏よりも葬式場の会館化が遅れていたことです。即日返しにするならばその品物を置いたり受け渡しをするスペースを受付周辺に確保しなければなりません。自宅や地域集会所などでは場所も狭く、雨天の場合にはさらに困難でした。また大凡半返しが定着していたこともあり、当初から一点返しはなかなか受け入れられず、三点返しや五点返しが行われることが多かったことも影響しました。そして数種の比較的単価の高い商品を常時相当数備蓄しておかなければならないという事情は、ギフト会社の資金繰りをさらに悪化させました。また香典額に応じて品物が変わるということは、それを捌くための人員を要しましたが、これを通常はギフト事業者側が提供しましたので、小規模な葬儀では集まる香典額が少なく、受注の取りこぼしがなくても採算が厳しい、ということもありがちでした。さらに大きな壁となったのが、阪神間で90年代後半から急激に広がった香典類の辞退傾向です。これは95年の阪神淡路大震災以降、人の移動や街の再編が著しく、地縁が減退したことや、互いに大変なときに気を遣い合うのをやめようという意識などから起こったものと推測されますが、このことにより香典返しそのものの需要が減少したのです。他にも「予め香典返しを用意しておくというのは、まるで香典を催促しているかのようで失礼だ」などという批判も聞かれました。こうした様々な理由が重なり、ギフト事業者もサービスを継続すること自体が困難となっていきました。そして今日においても、即日返しは一部の大手葬儀社などが自社の会館内で行う程度のことに止まり、地域への定着には至っていません。

*1参考：漢字ペディア（公益財団法人 日本漢字検定協会）等

*2表現文化社刊「SOGI」 通巻115号 p80 ロサンゼルス の 葬送 瞥見期(1)

*3参考：群馬県高崎市, 栃木県足利市, 埼玉県北足立郡伊奈町などのウェブサイト

コラム：キリストへの香典

”家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。”

(マタイによる福音書 第2章11節)

香典(奠)という語は死者に対する供え物という意味で解釈されていますが、「奠」の字の本来の意味を辞書で引くと「神仏への供え物」となっています。日本においては死者と神仏を近しいものとするために、死者に対するものは神仏に対するものと同じように捉えられてきたのでしょう。

ところで、神仏に香を供える行為は洋の東西を問わず、古くから様々な宗教・風習で見られますが、聖書の中にも香は登場します。旧約聖書には幾度も香を焚き神様に捧げる描写が出てきますし、新約聖書でも例えばイエスの誕生に際して来訪した東方の三賢人(博士)の贈り物も、黄金を除いた他2つは香でした。乳香(ルバーン)、没薬(ミルラ)ともに木の樹脂で、乳香は白くて焚くと甘い香りがし、没薬は褐色で少し刺激臭がします。

現代でもカトリックや正教会などではこれらを混ぜた香が聖堂で焚かれます。神様を拝礼する際に焚く香は祈りの象徴とも言われています。空中に立ち上っていく煙を、神様のもとへと上っていく祈りに重ね合わせているのでしょう。そう思うと、チベットの鳥葬(天葬)も空を飛ぶ鳥が魂を天へ連れて行くことを願ってのものであり、人類は押し並べて、自らの手の届かない天へと昇っていくものを見ると、神秘的な心持ちを抱くものなのかもしれません。

キリスト教では死者を神仏として拝礼しませんから、供え物もしません。その意味では香典という語を嫌う傾向がありますけれど、実は単に字義的な香典行為はキリスト教でも行われている、というふうに考えてみると面白いですね。じゃあ香典返しは…？そうですね、神様からの御恵みや平安が、私たちに与えられれば幸いですね。半返しどころか、全返しを超えて余りあるお返しですけれども。

▽返礼の目的による区分

「礼状」の目的による区分は返礼品と変わりません。そもそも返礼の意義は感謝を伝えることにあるのですから、むしろ返礼品と礼状であれば御礼を申し述べる礼状が主であり返礼品が従だとも言えます。そこで、礼状の項においても丸数字は返礼品のそれと対応しています。

▽礼状の名称

①は主に「会葬礼状」と呼ばれます。ただし「葬儀の中心となる葬式への参列のみ会葬と呼ぶ」という理解から、葬式においては「会葬礼状」、通夜などの弔問においては「弔問礼状」「通夜礼状」などと呼び分けて文面を変える場合もあります。また故人や喪主の氏名などを付さない出来合いの簡易な礼状を用いる場合もあります^(例1)。近年は葬式のみ1日で済まされることが増えたこともあり、仮に通夜などの弔問を受けるとしても、準備の無駄がないよう葬式に合わせた日付・文面の会葬礼状を弔問者にも配ることが合理的だと考える人もいます。さらに葬式の際に配布するのではなく、後日同様の趣旨（あるいは多少内容を追加して）の礼状を配布または送付する場合があります。これらは「後礼状」や「葬後通知」などとも呼ばれます。（なお英語で礼状はサンキュー・カードなどと呼ばれているようですⁱⁱ⁾）

②は本義はともかくとして、通常は返礼品に添えて送られるため、特段の名称を持たず「香典返しの礼状（挨拶状）」「偲び草の礼状（挨拶状）」などと呼ばれています。

③は①②のいずれかの呼称、あるいは単に「礼状（挨拶状）」などと呼ばれることも多いでしょう。

④及び⑤には特段の名称が付されているという話は聞いたことがありません。香典返しなどと同じように、「～の礼状（挨拶状）」と呼ぶことで足りるでしょう。

▽礼状の外形

①は一般的に葉書大で作成され、単葉、二つ折り、変形二つ折り（ずらし折り）などの

台紙が用いられます。それを封筒に入れる場合もあります。②は以前は封筒に入れた巻紙様のものが多く見られましたが、近年は全体的に簡略化傾向にあり、①と同様のものも見られます。③は②に準じます。④⑤及び①の後日配布は、返礼品に添える場合は②に準じ、礼状のみ郵送する場合は①と同様のものの他、一般的な便箋や切手付き葉書などが用いられることもあります。

▽礼状の変遷

大凡90年代頃までは、礼状類にオリジナリティが求められることはほとんどありませんでした。外形的にも内容的にも定型的で、文面は現在では古風・冗長・難解といった批判が先に立ちそうなものであり、台紙や封筒も重厚な大礼紙などが好んで用いられてきましたが、むしろそのような突飛でない、言わば格式張ったものが安心だと捉えられる傾向が強くなりました(例2)。極端に言えば、礼状は文面を読むものではなく、添えるということ自体に礼節としての意義を求められていたのです(これは告別式の遺族挨拶でも同様で、司会者が挨拶文を作成して代読する体を取ることも少なくありませんでした)。この傾向は恐らく、高度経済成長期から続く「葬儀を人並みに」という志向の延長線上にあると見られますが、他にもこの頃までの礼状の作成は専らギフト事業者等に依存し、雛形の提供を受けていたことも影響しています。ある地域で葬儀社に出入りするギフト事業者が限られているような場合、どの葬儀社の取り扱う葬式に参列しても礼状の文面は同じ、などということもありがちでした。

2000年代になると、家庭用PCやプリンターなどの普及が進み、また参列者の減少に伴い必要とされる礼状の枚数も減少傾向にあったことなどから、葬儀社が自社内で礼状を作成することも増えました。葬儀の個性化を志向する人々が現れ始め、独自の文面の礼状が作成されるケースが出てきたことも影響しているでしょう。そのためこの頃から、葬具事業者や遺影加工事業者などが、プリンターでの印刷に適した比較的取り扱いやすい礼状用台紙も取り扱うようになってきました。現在ではこのような台紙もバリエーションに富み、よりカラフルにもなっています。また礼状の文面も比較的平易になり、旧来はほとんど付されなかった句読点が付されているものや、本人の遺影やメッセージ、好きな言葉などが合わせて印刷されているようなものも見られるようになりました(例3)。

▽礼状の文章の構成要素

根本的には礼状の文章は贈る人の感謝の気持ちを表しているのですから、その内容は当

然に贈る人の感情や表現力、好みによって変わります。そのため御礼文の構成や表現がどのようなものであるべきか、ということ自体を、すなわちマナーとして決めることが必要とまでは言えません。しかし、御礼文の構成要素がどのようなものであるかを意識しておくことは、マナーではなく意思の疎通の観点から重要です。

まず、御礼文に最低限必要な構成要素は次の三つと言えるでしょう。

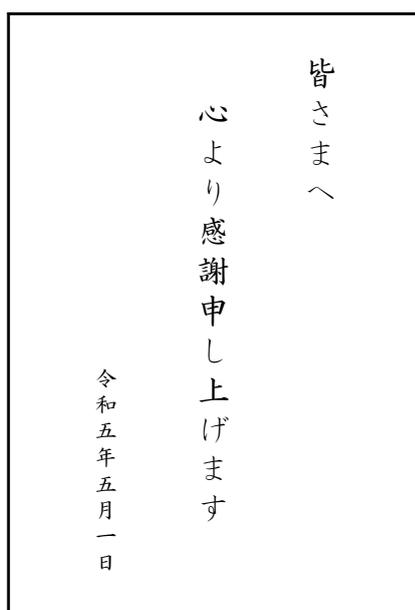
- I. 誰からの
- II. 何に対する
- III. 御礼の言葉

巻末の[例1：弔問礼状の例]に示した文章を当てはめてみましょう。

本日はお忙しいところ御弔問頂き〓誠に有難うございました〓
御厚情に心より御礼申し上げます 喪主

この例でも相当に簡潔に見えますが、さらに三要素である「御弔問頂き 有難うございました 喪主」だけを抜き出しても、端的な御礼文として成立することが分かります。

では、次の2つの例ではどうでしょうか。



どちらも三要素のうちⅢの「御礼の言葉」しか無いように見え、一般的な礼状からすると不十分なようにも思えます。しかし、どちらかというとな右の例の方が礼状として受け入れやすいのではないのでしょうか。それは人物の写真が自ずとⅠの「誰からの」を示し、その人との関係性の中でⅡの「何に対する」を受け取った人がそれぞれに想像する余地があるからでしょう。すなわちここが“伝わる”礼状の最小限度と言ってもよいでしょう。

これら最低限必要な構成要素に多く加えられるのは次の二つです。

Ⅳ. Ⅱの補足

Ⅴ. いつのことか

本日は父 ○○の告別式にⅣご参列くださり誠にありがとうございます。

家族一同ともに謹んで御礼申し上げます。

令和五年五月一日Ⅴ

長男 ○○ ○○

出来合いの弔問礼状にこれらの要素を加えるだけで、急に礼状らしく見えてきます。この御礼文が、その葬儀に“固有のもの”になったために、実体感が増したからでしょう。

必要な構成要素としてはこれらで事足りますが、より丁寧に気持ちを伝えていこうとするならば、次ようなものを加えても良いでしょう。

Ⅵ. 死の状況など

Ⅶ. Ⅱ以外のことに対する御礼

Ⅷ. 自分の心情

Ⅸ. 相手に対する気遣い

Ⅹ. 尊敬・謙譲表現

謹啓Ⅹ

過ぐる五月一日、母 ○○は八十年の生涯を終え、安らかに眠りに就きました。Ⅵ

今や彼岸にて先立ちました父と再会し、喜んでいることと信じております。Ⅶ

生前に皆様より頂きました御交誼に、母に代わり御礼申し上げます。Ⅷ

また本日はご多用中にも拘わりませずⅨ、御会葬下さり誠に有難うございました。

本来であればお世話になりましたお一人お一人にご挨拶に伺うべきところ、

略儀ながら書中をもってご挨拶に代えさせていただきます。Ⅹ

敬白Ⅸ

令和五年五月三日

喪主 ○○ ○○

親族一同

他にも礼状の変遷の項で述べたように、御礼文の本文の内外で当人の個性を表現するための工夫がされることもあります。例えば前出の当人の写真などもそうですし、当人が好きだった言葉や、受け取る人へのメッセージなどが添えられることもあります。また時には御礼文を遺族の言葉ではなく当人の言葉として表現するような仕様も見られます。キリスト教葬儀の礼状において聖句を添えることなども、この類に含まれるでしょう。さらに、この類だけを礼状と独立して作成、配布することもあります。これらは「メモリアルカード」などとも呼ばれます(例4)。(※ただし、遺影の印刷されているものは受け取った人によっては処分に困るという意見もあり、一律配布ではなく欲しい人にだけ渡すなど、配慮が必要な場合もあります)

▽表現と置き換えの例

以下は各要素における表現の例や、宗教等の属性による語の置き換えの例です。本文中や巻末のサンプルと併せてご覧ください。ただし、冒頭述べたように返礼の第一義は「相手に感謝の気持ちを伝えること」ですから、後述するように凝った言い回しや属性的な「らしさ」よりも、贈る人の世代などにも見合う、率直で平易な言葉遣いや文脈の自然さのほうがよほど大切です。

<Ⅰ. 誰からの>

『喪主 ○○○○』『遺族代表 ○○○○』『○○○○(長女)』
『故人の氏名』(当人の言葉として表現する場合に限る)
(代表者の脇に付けるなどして)『親族一同』『家族一同』『遺族一同』

<Ⅱ. 何に対する>

『御会葬賜り』("会葬"が"葬式への参列"を意味するので、一般に式名称を付しない)
『御弔問頂き』『告別式に[御参列下さり/お越し下さり/お運び下さり]』
『御[丁重/鄭重]なる[御弔慰/弔詞/弔辞]を賜り』(やや古風)

(香典・供物) 『葬儀に際しましては大層な御芳志を賜り』(やや古風)

(実務) 『告別式に際しましてはお力添えを頂き』

(葬後) 『皆様より頂戴しましたお支えやお励ましに』

< III. 御礼の言葉 >

『誠にありがとうございます』『謹んで御礼申し上げます』

『有り難く厚く御礼申し上げます』『心よりの感謝を申し上げます』

< IV. IIの補足 >

『[〇〇 〇〇/故〇〇 〇〇/父_{など} 〇〇/亡父_{など} 〇〇]の[葬儀/告別式_{など}/お別れ]に』

< V. いつのことか >

『[令和五年/二〇二三年]五月二十三日』

(キリスト教徒にはキリスト教由来の西暦表記が好まれます。

西暦を漢数字で表記する場合は十や千を省くことが多いでしょう)

< VI. 死の情況など >

『九十五年の長きに亘る生涯を閉じました。』

『過ぐる〇日、自宅にて家族の見守る中、静かに息を引き取りました。』

『かねてより療養中でしたが、薬石効なくついに身罷りました。』(古風)

『急な病を得、敢え無く[逝去/死去]いたしました。』

『安らかに天国へと旅だって行きました。』

『急性心不全により、この世を去りました。』

(キリスト教) 『地上での走るべき道程を走り終え〜』『与えられた地上での歩みを終え〜』

(カトリック) 『天へ帰って行きました。』

(プロテスタント) 『[主に/天に/御許へと]召されました。』『御国へ招かれました。』

(SDAなど) 『[平安のうちに/御手のうちに]しばしの眠りに就きました。』

< VII. II 以外のことに対する御礼 >

『生前皆様より頂きました[御交誼/御厚情]に、故人などに代わり御礼申し上げます。』
『長年に亘る皆様との温かいお交わりに～』
『[故人/○○/母など]の人生に寄り添い支えて下さった皆様に～』
『病を得てより後も、今日までお励まし下さいました皆様に～』

< VIII. 自分の心情 >

『大往生であったと思います。』
『すでに痛みもなく、安楽に過ごしていることでしょう。』
(仏教) 『お浄土にて大好きな花に囲まれているのではないのでしょうか。』
(キリスト教) 『故人はすでに御国にて憩っていることと信じております。』
(キリスト教) 『主の御懷に抱かれて、安らぎを得ていることでしょう。』
(キリスト教) 『長年通い慣れた教会でこうして皆様と最後の礼拝を守れることを、故人なども大変に喜んでいることと思います。』

< IX. 相手に対する気遣い >

『本日は[ご多用中/ご多忙中]にも拘わりませず』 『お忙しい中を～』
『年の瀬迫る慌ただしい折に～』 『新年も早々より～』
『[暑さ/寒さ]厳しき折に～』 『遠路遥々ご参集下さり』
『皆様もどうぞご自愛下さい』
(キリスト教) 『皆様の上にも主の平安が注がれますようお祈り申し上げます』

< X. 尊敬・謙讓表現 >

『拝啓ー敬具』 『謹啓ー敬白』 など (キリスト教) 『頌主ー在主』 など
『本来であれば皆様のお膝元までご挨拶に伺うべきところ～』 (古風)
『略儀ながら書中をもって御礼申し上げます』
『何分にも取り紛れておりますところ、不行き届きの段御容赦下さい』

▽キリスト教の礼状の実際例

◇会葬礼状

〇〇 〇〇は与えられた地上での歩みを終え主によってみもとへと召されました。
これまで皆様より頂いた温かいお交わりに故人に代わり心より御礼申し上げます。
また本日はお忙しい中をお運びくださり誠にありがとうございます。
悲しみを共にしてくださる皆様の上にも
主よりの慰めと平安が豊かにありますようお祈りいたします。

二〇△△年△月

〇〇 〇〇

[故人愛誦聖句]

◇会葬礼状（ノンクリスチャン遺族→クリスチャン参列者）

父・〇〇 〇〇の葬儀に際しましては
ご多用のところご参列いただきありがとうございます
過日〇月〇日 〇〇は本人の信仰していた神様のもとへと旅立っていきま
かねてより本人の希望であった
同じ信仰を持つ皆様にお見送りいただくことができましたこと
家族として大変有難く感謝申し上げます
あらためて 〇〇と親しくしていただいた皆様には心より御礼申し上げます

二〇△△年△月

〇〇 〇〇

◇後礼状

過ぐる〇月〇〇日 母 〇〇 〇〇が老衰のため
地上での〇〇年余におよぶ人生の旅路を歩み終え 天の御国へと召されました
本人の希望もあり [地名]の住み慣れた自宅にて
ささやかながら近親者で祈りをもって見送りました
今は先に召された父や旧友の皆様、愛犬とも再会し
喜んでいることと信じております
長年にわたり皆様より頂戴しました温かいお交わりに 心より感謝を申し上げます
書中にて大変失礼をいたします 皆様におかれましてもどうぞご自愛くださいませ

二〇△△年△月

〇〇 〇〇

◇後礼状(兼寒中見舞い)

寒中お見舞い申し上げます

年の暮れより寒い日が続いておりますが、

皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。

こちらは△△月△△日に父 〇〇が人生の旅路を終え

主のみもとへと召されました。

いまだ悲しみと寂しさの中にあいながらも、

多くの皆様のお支えに感謝しながら日々を過ごしております。

常であれば新春の慶賀を皆様と分かち合いたいところではございますが、

いまだ取り紛れておりますゆえお知らせとともに

差し当たり書中をもって失礼いたします。

まだ寒さは続きそうです。皆様どうぞ一層ご自愛ください。

二〇△△年△月

〇〇 〇〇

◇香典(御花料)返しの礼状

過日、〇〇 〇〇の葬儀に際しましては、

皆様より温かいお支えを頂き誠にありがとうございました。

家族近親一同深く感謝いたしております。

つきましては、ささやかではございますが

御礼のしるしをお送りいたしますのでご受納ください。

どうぞこれからも変わらぬ良きお交わりをいただければ幸いです。

皆様とご家族の健康が主によって守られますようお祈り申し上げます。

二〇△△年 △月

〇〇 〇〇

◇関係者への礼状(返礼品付き)

過日、〇〇 〇〇の葬儀に際しましては、

一方ならぬ御弔慰を賜り、誠に有難うございました。

皆さまのお祈りに支えられ、諸事滞りなく相済ませることができました。
故人も今や安らかに眠っていることと信じております。
早速にも御挨拶に伺うべきところではございますが、
略儀ながら書中をもって御礼申し上げます。

二〇△△年△月 ○〇 ○〇

なお、ささやかではございますが

御礼のしるしをお送りいたしますので どうぞご受納ください

▽キリスト教"らしさ"の程度

キリスト教葬儀における御礼文の用語や言い回しをどの程度キリスト教"らしく"するか、ということはひとつの思案所です。例えばかなりキリスト教色の強い、次のような礼状があるとしめます。

そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のは過ぎ去ったからである。」

ヨハネの黙示録 21章3-4節(新共同訳)

御加禱に感謝いたします

復活の主の栄光を誉め讃えます。

〇〇 ○〇は過ぐる5月22日、
御神より与えられた地上での歩みを終え、
守りのうちに天つ御国へと帰って行きました。

この旅路の中で、信仰を強め支えてくださった多くの兄弟姉妹に心より感謝を申し上げます。
今や故人も主に備えられた慈いの汀にて
先に召された地上の家族や教友たちと共に
重荷を下ろして安らいでいることでしょう。

ひとときの別れは寂しいものではありませんが
私たちがいずれの日にか再び巡り会い
結び合わされるという約束を堅く信じ
残された道程を歩み通してまいりましょう。
その日までどうぞ皆様もご自愛ください。

本日は父の見送りにお集まりくださり
誠にありがとうございました。
天来の御慈しみが皆様の上にも
豊かに注がれますようお祈り申し上げます。

主に在りて

2023年5月25日

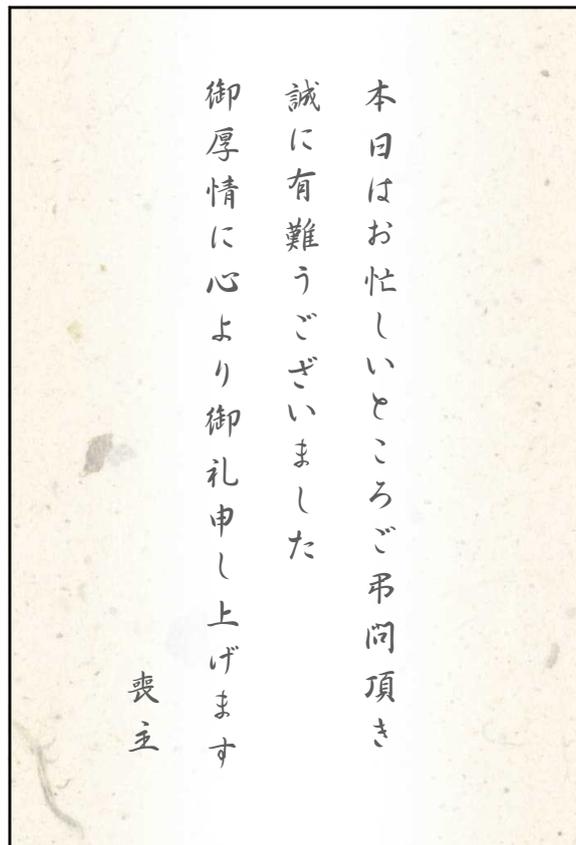
〇〇 ○〇

『み国に入る日まで いつくしみひろき
みつばきのかげに はぐくみたまえ、主よ。
また会う日まで、また会う日まで、
神のめぐみ たえせず共にあれ。アーメン』
讃美歌21 465番3節(故人愛唱)

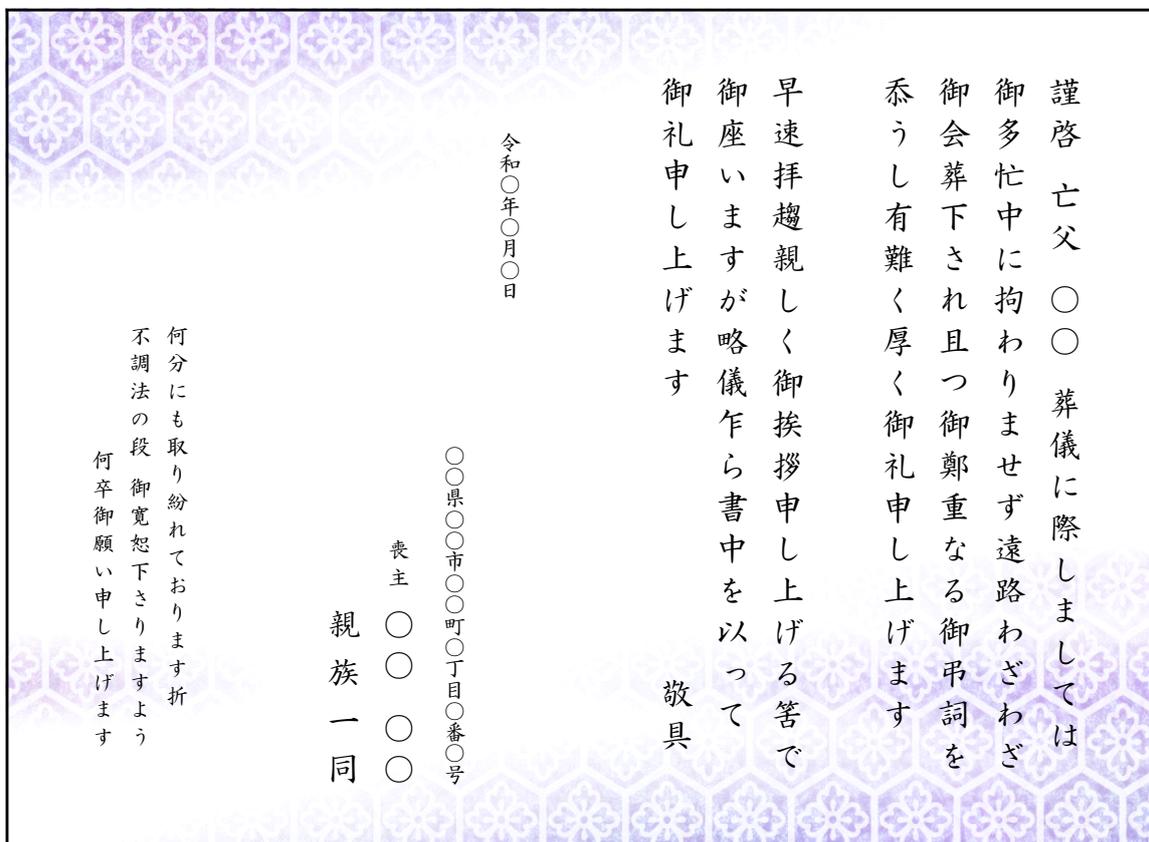
差出人も受取人もクリスチャンであり、日頃から教会での言葉に親しんでいるような場合には、このような文言・構成でもあまり違和感はないかもしれません。しかし、受取人がノンクリスチャンであれば、差出人の感謝の気持ちが十分に伝わりきらない懸念がありますし、差出人がノンクリスチャンであれば、本人の用いる言葉としては不自然で、過剰

な演出と受け止められる可能性もあります。

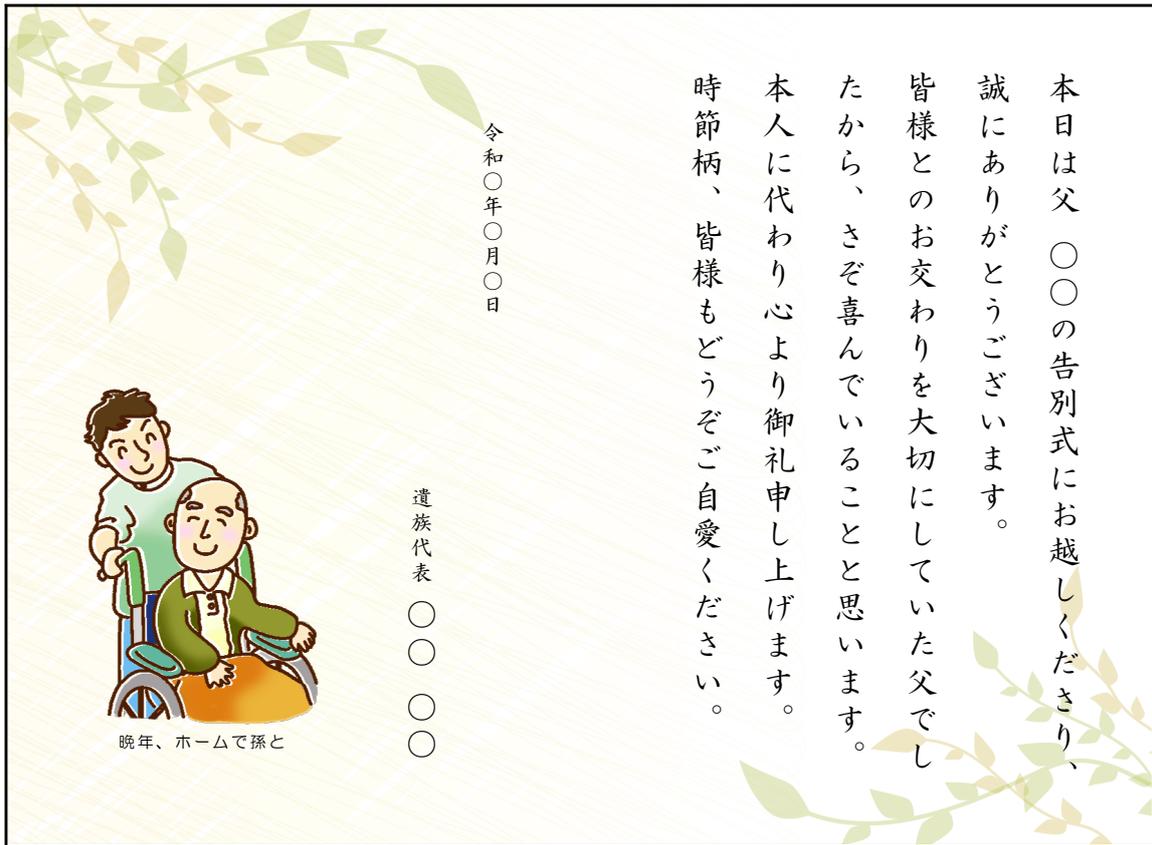
変遷で触れたように、一昔前の「添える」ということに重きを置かれた時分であれば、むしろ格好をつけて「キリスト教葬儀ではこういった本格的な文言を用いるのが礼儀だ」などと良好な評価を得たかもしれませんが、現在では葬儀全般を通して「個々にその人らしく」という志向が強まっていることもありますから、感謝の気持ちを幅広い属性の人に伝えようとするならば、より一般的な言葉や言い回しを用いるほうが適当とも言えます。特にキリスト教専門でない葬儀社がテンプレートとして持つのであれば、無宗教葬儀で用いるようなものでも十分で、差出人が特段にこの文言を入れたい、という場合に対応する程度でも構わないでしょう。



例 1 : 無記名・弔問礼状の例



例 2 : 90年代頃までの礼状の例



例 3 : 話し言葉・句読点付き・遺影入りの例



例 4 : メモリアルカードの例